

「女優は毛穴まで嘘をつく」

高瀬秀芳

登場人物

成島壮子 (30) (27) 売れない舞台女優。
金本時子 (30) (27) 壮子の親友。
エミリー (37) 時子行きつけのゲイバーのママ。オカマ。

成島孝臣 (65) 壮子の父。
成島春江 (63) 壮子の母。
工藤歩 (32) 時子の彼氏。

滝藤一馬 (42) 劇団「八方塞がり」の座長。
原山百合 (40) 劇団「八方塞がり」の制作。
劇団員 A
劇団員 B 劇団「八方塞がり」の劇団員。
伊勢島幸助 (54) 人気演出家。

スタッフ
佐倉 (声) (45) オーディションのスタッフ。
安川るり (33) ニュースキャスター。
富山武敏 (42) ニュースキャスター。
摂津雅夫 (38) 日本宝くじ協会会員。
我妻孝蔵 (37) 自称探偵。
管理人 (53) 壮子のアパートの管理人の男性。
金丸富雄 (48) 銀行の副支店長。
銭谷保 (41) 銀行の警備員。

成島卓三 (54) 自称・壮子の叔父。
小林節子 (30) 自称・壮子の小学校の同級生。

夜間受付 (声) 病院の夜間受付係。
主人公 壮子の舞台の主人公。
司会 テレビ番組の司会者。
ゲスト テレビ番組のゲスト。
佐田先生 テレビ番組に出演する先生。

○公民館・室内（夜）

あまり綺麗ではない公民館の一室。

壁には「大声禁止」などの貼紙。

割と大声で芝居の稽古をする劇団「八方塞がり」のメンバー12名。

成島壮子（30）は舞台後方で木のような形で立っている。

演出席に滝藤一馬（42）、隣に制作の原山百合（40）が座っている。

劇団員A「おい、お前え！ 二度とその減らず口がきけねえようにしてやろうかあ！？」

劇団員B「あたいは……あたいは命に代えてもこの子を守る！」

劇団員A・B「はい、赤ちゃん赤ちゃんお腹の子♪ おたあまじゃくしと卵の子♪」

壮子・劇団員A・Bが奇妙な振り付けで踊る。

滝藤、手をパンパンと叩いて止める。

滝藤「はいはい、じゃ、今日はここまで！
お疲れした！」

全員「お疲れしたー」

滝藤「あ、チラシ追加持って来たから、欲しい人、持ってってー」

百合「あとノルマ払える人、私までー」

滝藤、チラシをテーブルに置く。

【劇団八方塞がり 第八回公演

『もう一方も塞ぎます？』】

微妙にセンスのないチラシである。

数名、チラシを取りに来る。

5名、百合にノルマを払う。

壮子、それをチラ見し、部屋の隅で携

帯を出すと、佐倉マネージャーから着

信とメールが入っている。

壮子、メールを開く。

【差出人…佐倉マネージャー

内容…先日のオーディションの件。稽

古終わったら電話ください。】

壮子、電話をかけるが、繋がらない。

百合が近付いて来て話し掛ける。

百合「壮子ちゃんは？」

壮子「あ、ごめんなさい。分割でもいいですか？」

百合「違う違う。ノルマじゃなくて。みんな飲みに行くみたいだけど、どうする？」

壮子「あー……いやあ……」

百合「金欠？ たまには行った方がいいよ？」

壮子「いや、今日は……」

壮子、佐倉からのメールを見せる。

壮子「これ受かってたら明日撮影なんです」

百合「へえ〜。手応えありなの？」

壮子「まあ、オーディションでは面白いって褒められたし、うちのマネージャー、ダメな時は大体メールで言うから……」

百合「じゃあもう決まりじゃん！ あ、飲み行かないならさ、これ預かっというて？」

百合、集金した封筒を壮子に渡す。

壮子「え……これって……」

百合「ノルマ。5人分」

壮子「ご、50万！？」

百合「うん。それ持ってたら酔えないから」

壮子、封筒の中を見て、

壮子「ふわく……：……：……：……」

百合「次の稽古の時に持って来て」

滝藤「あと2分ー！ 出れる人出ちやってー」

全員「はーい」

壮子、50万円の写メを撮っている。

百合「ちよつとあんた何やってんのよ？」

壮子「いや、珍しいからツイッターに……」

百合「やめなよ、何でもかんでも呟くの」

壮子「だってこんな機会ないし……：……それより

百合さん」

百合「ん？」

壮子「何の撮影か聞いてくれないんですか？」

百合「ああ、明日？ 何、企業VPとか？」

壮子「映画なんですよ、伊勢島幸助の」

百合「えっ、伊勢島幸助！？」

○オーディション会場・室内（回想）

演出家・伊勢島幸助（54）とスタッ

フが長机に座っている。

壮子、その前で一人演技をしている。
パイプ椅子が4つあり、他の3人は座
って見ている。

伊勢島、額に手を当て、考えているよ
うにも寝ているようにも見える。

壮子、芝居が大きくて下手である。

壮子「『知らないようだから教えてあげるわ。

私の名前はね……オリ……』」

伊勢島「はいはい」

スタッフ「はい、そこまで大丈夫ですー。

じゃ、オーディションは以上になります。

結果の方は、今月中にご連絡しまーす」

○同・建物入口付近（回想）

伊勢島とスタッフが歩いている。

スタッフ「すみません」

伊勢島「いいいい。元々そんなに期待してな
いし。こういうのは、一応一般オーディシ
ョンもやりましたよー、っていう事実が大
事だから」

伊勢島とスタッフ、建物を出る。

そこへ壮子が駆け寄る。

壮子「あの、本日はどうもありがとうございます
ました！ 私、昔から監督の作品が大好き
で、全部観てます！」

スタッフ「ちよっと……」

伊勢島「ああ、いいいいよ。ありがとう。
君、すごく面白かったよ。何て言うか、う
ん、ここ（心）で演技してたのが良かった」
壮子「ほ、ほんとですか！？ あの、これ、
来月舞台やるんで、良かったらご招待でき
るんで！」

壮子、チラシを渡す。

伊勢島「へえー、行けたら行くよ」

壮子「あ、ありがとうございます！」

（回想終わり）

○電車の中（夜）

吊革に掴まっている壮子。

思い出し笑いをしている。

○壮子のアパート（夜）

ゴミや食器が散らばって、足の踏み場もないほど散らかった1Kの部屋。

壮子、電話をしながら入って来て、テレビのスイッチを入れ、段ボールから最後のカップラーメンを出し、ポットのお湯を注ぐ。

ポットには『電源抜く！』と貼紙してあるが、電源は抜いていない。

壮子「もしもし、時子？ 私、ついに伊勢島幸助の映画に出れるかも！ まだ確定じゃないんだけどさ、時子には早く知らせたくて。私の不運な時代をゼーんぶ知ってる大親友だからさ。また決まったら連絡するから、折り返しは不要でーす」

壮子、電話を切る。

手帳を開き、明日の予定【撮影？】と書いてあるのを見てニヤける。

手帳の別のページを開くと、正の字がぎっしりと並んでいる。

所々に数字があり、何かを997まで
数えたことが分かる。

壮子は、3年前のことを思い出す。

○居酒屋（回想・3年前・夜）

壮子（27）と時子（27）が酒を飲
んでいる。

時子「壮子はさ、きっと長生きするよ」

壮子「何それ。時子よりってこと？」

時子「私なんかより全然」

壮子「え、なんでなんで？」

時子「人生ってね、死ぬまでにいいことと悪
いことが同じだけあって、プラマイゼロに
なるように出来てるんだって。だからさ、
運がいい人は突然事故で死んだりするわけ
よ。けど、天才的に運が悪い壮子は、何か
一個で突然プラマイゼロにはなり得ないか
ら、なかなか死なないってわけ」

壮子「えー、全然そんな気がしないんだけど」

時子「今はね、運を貯めてると思えばいいん

だよ」

壮子「そこそこ貯まってると思うんだけど」

時子「ちゃんとしてつけてみたら？」

壮子「つけるって？」

時子「悪いことがあったら正の字書いてさ、

千個くらい貯まったら宝くじ買うとか」

壮子「こんな運が悪い人間が当たるわけない

じゃん。それ、もう寄付だよ、寄付」

時子「いいから、とりあえず数えてみなって」

(回想終わり)

○壮子の部屋(夜)

手帳の正の字を見つめている。

壮子「もしかして、あと3つ悪いことが起き

たら、合格連絡が入るとか……」

その時、佐倉(45)から着信が入る。

壮子「えっ、ちょっと待って、まだ準備が：

…(少し考え)ま、誤差の範囲か」

壮子、電話に出る。

壮子「はい、なるし……」

佐倉の声『成島あ、お前、何やった？』

壮子「はい？」

佐倉の声『伊勢島さん怒らせんなよお。うち、弱小事務所なんだからよお。仕事来なくなったらどうすんだよお』

壮子「いや、あの……」

佐倉の声『次なんかやったらクビだからな』

電話が切れる。

壮子「……うがあああああ！」

隣人から壁を叩かれ、ビクツとする。

壮子「はあ……」

壮子、手帳の明日の予定をグチャグチャと消して、998本目の線を引く。
テレビではニュース番組の特集が流れ、
キャスターの安川るり（33）と富山武敏（42）が喋っている。

安川「本日の特集は、宝くじの時効当選金についてですが、富山さん、1億円以上の当たりが換金されない本数、どれくらいあると思いますか？」

富山「うーん、20本ぐらいですか？」

安川「さあ、どうでしょう。今日は日本宝くじ協会の撰津雅夫さんに来て頂きました」

撰津雅夫（38）がスタジオ入りする。

撰津「よろしくお願いします」

壮子「20本もあつたら20億じゃん。バカ

なのかな、このオッサン……あっ！」

壮子、ラーメンのことを思い出して慌てて開けると、完全に汁を吸っている。

壮子「うあー……マジか……」

壮子、手帳に999本目の線を引く。

壮子「ま、記念すべき千本目が『ラーメンが伸びた』じゃなくて良かったか」

壮子、割り箸を開け、爪楊枝で指を怪我する。

壮子「いてっ！」

壮子、血が出た指を吸う。

壮子「神様あ、千ポイント貯まりましたよお。

確かバンドエイドが実家から……」

壮子、実家からの段ボールの中の野菜

を掻き分け、バンドエイドを取り出す。

壮子「あったあった」

すると、その下から封筒が出て来る。

壮子「ん？ 何だこれ」

壮子、封筒を開けると、中には手紙と

宝くじ10枚連番が入っている。

【壮子へ。今までの不運を全部つき込んだら、何か当たるかも。母】

壮子「ふんっ」

壮子、宝くじと手紙を段ボールの中に

投げ捨て、バンドエイドを指に貼りつ

つテレビを見る。

富山「えっ、73本も！」

撰津「期限まであと2日ありますが、現状は。

そして、今の時点で換金してない人は、気

付いていないことがほとんどなので、おそ

らく最終的に70本ほどかと思えます」

安川「なるほど。えー、当選金の受け取りは

明後日までとなっております。皆様、今一

度お手元の宝くじをご確認ください」

壮子、気になって宝くじを取りに行く。
携帯で当選番号のサイトを開き、ラー
メンを食べながら確認する。
1枚目が1等に近い番号である。

壮子「え……？」

連番なので期待が膨らむ。

4枚目で1等が当たっている。

前後賞もあり、3億円当たっている。

何度も確認するが間違いない。

壮子「お……おわわああああ！ 時子お、

時子おおおお！」

壮子、時子に電話をかけるが留守電。

壮子「時子おお！ 折り返し待あああつ！」

隣人から壁を叩かれる。

壮子、電話を切り、宝くじの写メを撮

って、【人生変わった！ なああう！

とツイッターにアップする。

壮子「ふふ……ふふふふ……ふはははは！」

壮子、笑いが止まらない。

○工藤のマンション・寝室（夜）

工藤歩（32）、ベッドでスマホを見ている。

近くで時子の携帯に【壮子】から着信が入り、ほどなく止まる。

金本時子（30）、トイレから戻る。

工藤「また鳴ってたよ。壮子ちゃんから。なんか留守電入れてたみたいだけど……」

時子「（無視して）陽性……だった」

時子の手には妊娠検査薬がある。

工藤「おおお、マジ！？ おめでどう！ いや、ありがとう、かな！」

時子「……喜んでくれるの？」

工藤「もちろん！ え、なんで？」

時子「結婚してないのに、重いかなって……」

工藤「全然！ あ、ご両親、厳しい感じ？」

時子「まあ、ビックリはするかも……」

工藤「じゃ、今度一緒に挨拶に行こう。それまでは赤ちゃんのことは内緒で」

時子「うん、ありがとう。壮子には言っても

いい？」

工藤「あー、けど、こういうのって安定期入ってからのの方が良くない？」

時子「そっか、確かに」

工藤「時子、大切に育てような」

時子「あつくん……」

工藤、時子を優しく抱き締める。

工藤の手にあるスマホは【中絶にかか
る費用】というページが開かれている。

○壮子の部屋（夜）

壮子、手帳の正の字を見ながら、その
一本一本に刻まれた、これまでの運の
ない人生を思い出している。

正の字一本一本が手帳から浮かび上が
り、文字と回想写真が表示される。

【小学校の遠足：祖父の葬式で欠席】

【中学の修学旅行：インフルエンザ】

【大学：右手を怪我して左手で受験】

【成人式：着物に鳥のフン】

【初出演ドラマ：主演不祥事でお蔵】

などなど。

壮子「全て今日までの布石……たまには……」

壮子、実家に電話をかける。

○壮子の実家・外観（夜）

畑の中に建つ昔ながらの田舎の一軒家。

○同・和室（夜）

農作業着で布団に寝ている成島孝臣

（65）、目を覚ます。

近くには春江（63）がいる。

春江「あなた、気が付きましたか」

孝臣「ん……どれくらい寝てた」

春江「かれこれ8時間ぐらいですかね、郵便

屋さんが気付かなかったら、今も畑で倒れ

てたんですから。もう畑仕事はやめに……」

孝臣「そういうわけにはいかん」

春江「いつまで続けるおつもりですか」

孝臣「跡取りが見つかるまでだ」

春江、15年前の家族写真を見て、

春江「跡取りって……太一は行方不明だし、

壮子は結婚する気配もないですし……」

写真には、孝臣、春江、太一、壮子が、

畑で野菜を持って笑顔で写っている。

春江の携帯に壮子から着信。

春江「噂をすればだわ。(出て)あんだ、い

つ結婚すんのだよ」

以下、適宜カットバック。

壮子の声「なによ、いきなり」

春江「早く農家志望の男性と結婚して……」

壮子の声「また跡取りの話？　そういうのっ

て長男の役目でしょ」

春江「そりゃ太一が戻って来たらあんたは好

きにしていいわよ。けど、あの子はもう1

0年も連絡がないのよ？」

壮子の声「探偵でも雇って探せば？」

春江「どこにそんなお金があるのよ」

壮子の声「お金なら……」

春江「あのね、父さん、今日また倒れたのよ」

壮子の声「えっ……」

孝臣「余計なこと言うな！ 一度家を出た奴は帰って来んでええ！」

春江「ちよつとあなた。壮子……とにかく、一度帰って来て相談しましょう」

○壮子の部屋（夜）

壮子「……嫌よ。ただの熱中症でしょ。入院でもしない限り帰らないから」

壮子、電話を切る。

壮子「あー、もう……！」

壮子、ベッドに突っ伏す。

放置した携帯にツイッター通知が入る。

【呟きが2 RTされました】

【呟きが24 RTされました】

【呟きが351 RTされました】

【呟きが1,000 RTされました】

○銀座の高級カフェ・外観（日替わり）

○同・客席

壮子、一人でケーキを食べている。

時子からラインが入る。

時子ライン『ごめん、あと10分』

壮子ライン『こっちこそ急にごめんね』

壮子ライン『（謝るスタンプ）』

壮子、紙袋から108,000円の値札が付いたブランドバッグを出してニヤける。

そこへ、我妻孝蔵（37）が近付く。

我妻「成島壮子さんでいらっしやいますか？」

壮子「そうですけど……」

我妻「私、こういう者ですが、ちよつとお兄様のことで、お時間よろしいでしょうか」

【我妻探偵事務所】の名刺を出す。

壮子「え……もしかしてうちの両親が？」

我妻「いえいえ、これは僕が高校時代の親友として勝手にやっていることです」

我妻、壮子の前に座る。

壮子「兄の同級生の方なんですか？」

我妻「ええ。ここ数年、太一君を同窓会で見

かけないもので、心配になって探し始めた
んですが、あとちよつとの所で難航してま
して……」

壮子「そうなんですか……」

我妻「どうしても調査費用が足りなくてです

ね……僕も、妻と子供がいるものですから」

我妻、妻と子供の写真を見せる。

壮子「……いくらあればいいんですか？」

我妻「そうですね……まずは50万ほど……」

壮子、買ってしまったバッグを見て、

壮子「あ……ちよつと今すぐには……週明け

とかで良ければ」

我妻「そうですか……この土日が勝負なんで

……せめて30万でもあれば……」

× × ×

壮子、一人で座っている。

時子が来る。

時子「お待たせ。何、この似合わない店」

壮子「たまにはね。さ、何でも食べて」

壮子、時子にメニューを差し出す。

時子「何これ、高っ！」

壮子「場所代よね、ほとんど」

時子「なに、宝くじでも当たった？」

壮子「えっ！？ ツイッター見たの！？」

時子「え？ ツイッター？」

時子、スマホで壮子のツイートをみる。

時子「え、これ、当たり券？」

壮子「うん」

時子「やめなよ、知り合いにたかられるよ？」

壮子「今日は10万までならたかっていいよ」

時子「え、10万！？」

壮子「劇団から50万預かったんだけどさ、

10万はこのバッグに使って、30万は探

偵に使って、残り10万しかないのよ。月

曜になったら3億入るから」

時子「……ごめん、全然分かんない」

壮子「だからあ、土日は換金できないの。月

曜になったら銀行に行くから」

時子「だからいくら当たったのよ？」

壮子「いや、3億だってば。ほら」

壮子、スマホで当選番号を出す。

時子「は……？ ……ほ、ホントだ……てか、これ削除しなよ！ すごい拡散されてるし、コメントも怖いわよ！」

リツイート数が2万になっている。

コメント欄には『おごつてく』『寄付

しろ』『偽造乙』などがある。

壮子「ホントだ……こわっ！ 今、消した！」

壮子、慌ててツイートを消す。

時子「しばらくは気を付けた方がいいかもね……で、探偵ってのは何？」

壮子「ああ、お兄ちゃんと同級生が探偵事務

所やっつてさ」

壮子、我妻の名刺を時子に渡す。

時子「我妻探偵事務所……」

時子、スマホで調べる。

壮子「50万でお兄ちゃんを見つけるって」

時子「あんた……まさか信じたんじゃないでしょうね」

壮子「いい人だったよ？ 30万円に負けて

くれたし」

時子「これ、住所も電話もデタラメよ」

壮子「えっ……！？　でも、お兄ちゃんのこと

とすごく詳しくかったよ！」

時子「あなたのツイッター遡れば誰だって詳しくなるわよ」

壮子「マジか……ま、まあでも30万くらいどうってことないし」

時子「……壮子。その考え方、危ない」

壮子「え？」

時子「この後、時間ある？　ちよつといい人を紹介するわ」

壮子「いい人？」

時子「困った時に相談に乗ってくれる、お母さんみたいな人」

○ゲイバー・バット&ボールズ（タ）

壮子「どっちかって言うとお父さんじゃない」

ママ・エミリー（37）がカウンターの中で開店準備をしている。

厚化粧はしているが、男だと分かる。

壮子と時子はカウンターに座っている。

エミリー「失礼な子。まだ自己紹介もしていないのに」

時子「ああ、ごめんなさい。ほら、いつも話してる壮子ちゃん。舞台女優」

エミリー「ああ、あの運が物凄く悪い！」

壮子「ちよつと、どんな紹介してんのよ！」

時子「ごめんごめん。で、こっちがママの」

エミリー「エミリーでえす。よろぴく」

エミリー、手を出す。

壮子、触れる程度の握手をする。

エミリー「怖がらないで。これは仕事用メイク。普段はもつと美人メイクだから」

壮子「え……ホントに？ 想像つかない……」

エミリー「そのうち見せてあげるわよ。で、要件は？ わざわざ開店前に来るってこと

は、何か相談があるんでしょう？」

壮子「（時子に耳打ちで）本当に大丈夫？」

口軽そうだけど……」

エミリー「聞こえてるわよ」

壮子「ひっ」

エミリー「覚えときなさい、オカマの耳は地獄耳、オカマの口は貝なのよ。秘密は守るわ。ちなみにココはまだアワビになってないけどね。ガハハハ……」

エミリー、股間を指して下品に笑う。

壮子、苦笑いをしている。

× × ×

3人、テーブル席で、時子がエミリーにツイートをを見せている。

エミリー「なるほどねえ。載せたのはマズかったわねえ。しかもあんた、1ヶ月前にメアドとかまで載せてるじゃない」

壮子「ツイッターから舞台チケット買ってくれる人がいるかもしれないから……」

時子「この子、人を信用し過ぎなの。ま、それがいい所でもあるんだけど」

壮子「そんなことないと思うけど……」

エミリー「女優って人を騙すのが仕事じゃな

いの？ よくやっていけるわね」

壮子「女優は別に嘘つきじゃないんで……」

エミリー「ま、私の前では嘘をつかないこと

ね。絶対にバレるから」

壮子「え？」

時子、本棚に近付きながら、

時子「ママはね、嘘を見破るのが得意なの」

エミリー「客商売でき、何万人も相手して来

たから、あー今嘘ついてるな、つてのが大

体分かるようになっちゃって」

壮子「へえ……」

時子、本棚から『「その日」から読む

本』を手に取る。

時子「あった！ これこれ」

壮子「何それ？」

時子「宝くじの高額当選者だけがもらえる本。

だよね、ママ？」

エミリー「そう。1千万円以上当てた人に配

られる。残念ながら私は当ててないけどね」

時子「え、そうなの！？ うわー、経験者の

アドバイスをもらおうと思ってたのに……」
エミリー「そんなお金あったらこんな店やってないわよ。こんな店って何よ！」

壮子「落ち着いて下さい。あの、どうしてこれを持ってるんですか？」

エミリー「昔銀行員やってたからね」

時子「え、そうなの！？　じゃあアドバイス出来るんじゃない？」

エミリー「まあ、一般人よりはね。けど既に拡散したものは手が付けられないから、今後はあらゆる連絡を疑ってかかるしかないわね」

壮子「分かりました……」

壮子のスマホ、【公衆電話】から着信。

時子「今どき公衆電話……？」

壮子が出ようとするが、エミリーが横から【留守対応】ボタンを押す。

留守電になり、春江の声が流れる。

春江の声『壮子？　お母さんです。今日ね、お父さんが入院したの。緊急ではないけど、

近いうちに一度帰って来てちょうだい……』

電話が切れる。

エミリー「お母さんはいつも公衆電話から？」

壮子「いえ、いつもは実家か携帯からです」

時子「病院だからじゃない？」

エミリー「2つの可能性があるわ。1つはお

母さんの声真似をした赤の他人がお金を振り込ませようとしている」

壮子「嘘……絶対本物だと思ったけど……」

エミリー「そうね。本人を知らないと物真似も出来ない。かつ物真似レベルが高く、悪人、という可能性は薄いかもね」

時子「もう1つの可能性は？」

エミリー「本物の母親が金を無心しようとして、父親が入院したと嘘をついている」

壮子「でも、母はツイッターなんて出来ないし、宝くじのことは言ってな……あ」

時子「なに？」

壮子「元々母から送られてきた宝くじだ」

エミリー「連番だから、表の数字を控えてた

ら分かるわね」

時子「でもさ、わざわざ壮子に送ってから振り込ませるって意味分からなくない？」

壮子「送って来たのは発表前だったから」

エミリー「送ったものの3億当たったと知って惜しくなった……」

時子「うーん……それなら発表のタイミングで電話してきそうだけど」

エミリー「だとしたら、やっぱりツイッター説が有力ね。お母さんがいつの間にかコンピューターおぼあちゃんみたいになったか、詳しい人がお母さんに入れ知恵したか」

3人、重い空気に包まれる。

壮子「え、本当に父が入院しただけって可能性はないんですか？」

エミリー「なくはないけど」

壮子「じゃ、携帯に電話してみます」

壮子、電話をかける。

エミリー「お父さん、入院してるというわね」
時子「それはなんか違う気が」

呼び出し音が鳴るが、出ない。

壮子「出ないです」

時子「病院だから出られないんじゃない？

きっと折り返しがあるわよ」

エミリー「メールでどこの病院か聞いてみたら？
で、そこにかけたら一発で分かるわ」

壮子「……」

時子「どうしたの？」

壮子「実は、両親には私しか頼る人がいないんです。兄が10年前に東京に出て音信不通になって……今は私が支えるしかないんです。信じてあげたいんです」

時子「壮ちゃん……」

エミリー、優しく頷いて、

エミリー「私は何もね、お母さんを疑ってるんじゃないの。お母さんを信じるために確かめるのよ」

壮子「……分かりました」

壮子、母にメールを打つ。

○壮子の部屋（夜）

携帯をポーツと眺める壮子。

その時、母からメールが入る。

【谷町病院だけど、帰って来る時は携帯に連絡しようだい。病院にいるか家にいるか分からないから】

壮子、谷町病院を検索し、電話する。

夜間受付「はい、谷町病院です」

壮子「あの、すみません。そちらに成島孝臣

という者は入院してますでしょうか？」

夜間受付「今これ夜間警備窓口に掛かってて、

ちよつと分からないんですよね。緊急だっ

たらナースステーションに繋がりますけど」

壮子「あ、いや、緊急では……父が今日入院

したって聞いたからビックリして」

夜間受付「今日？ 今日新規の入院はあり

ませんでしたよ」

壮子「え……」

その時、インターホンが鳴る。

男の声「成島さん？ いるんでしょう？」

壮子、怖くなる。

○工藤のマンション（夜）

時子、入って来る。

時子「ごめんね、今日は」

工藤「全然。壮子ちゃん、大丈夫そう？」

時子「全然、贅沢な悩みだったあ」

工藤「そうなんだ？ あの喫茶店、高いでし

よ？ あの子、貧乏じゃなかったの？」

時子「あー、あつくん口堅いよね？」

工藤「うん、ガチガチ」

時子「あの子さ、宝くじ当たったらしいのよ」

工藤「へえ、いいねえ。1万とか？」

時子「それがね……3億」

工藤「さ、さんおく！？ まじで！？」

工藤、驚いているが、工藤のPCには

壮子のツイートが表示されている。

○壮子のアパート（夜）

壮子、恐る恐るドアスコップを覗くと、

管理人（53男）が立っている。

壮子「なあんだ」

壮子、扉を開ける。

壮子「管理人です、とか言って下さいよお」

管理人「言ったら出ないでしょう。成島さん

ね、つかぬ事を伺いますけどね、もしかし

て宝くじでも当たった？」

壮子「えっ、どうしてそれを！？」

管理人「え、本当に当たったの？ いや、さ

つき高そうなバッグ持ってるのがちよう

ど見えたからね。家賃滞納してるくせに、

って思ってるね。しかし本当に宝くじがねえ

……え、いくら当たったの？」

壮子「……3000円です」

管理人「なわけないでしょ」

壮子「1万です」

管理人「それであるのバッグは買えないでしょ」

壮子「家賃は払いますので。いくら溜まって

ましたっけ……？」

管理人「3ヶ月分。24万。せめて1ヶ月分

でも払って欲しいんだけど」

壮子「あ、それなら何とか……」

壮子、封筒を取りに部屋に入る。

管理人「あるなら全部払ってよ？」

壮子「全部は無理ですー」

壮子、封筒から8万円を管理人に渡す。

管理人「まだ入ってるじゃないの」

壮子「いや、ほらもう千円札ばっかで……」

壮子、封筒の中を見せる。

管理人「あと2ヶ月分も早くお願いしますよ」

壮子「はい、また宝くじが当たったら！」

部屋の奥で、壮子の携帯にツイッター

更新通知が来る。

【なんで画像消しちゃったのかな？

再掲しまーす www】

削除した宝くじ画像が再び広められる。

○銀行前の道路（日替わり・朝）

黒ずくめ、ニット帽、サングラス、マ

スク、空のポストンバッグという、見

るからに怪しい恰好の壮子。

キョロキョロしながら銀行に入る。

○銀行・店内（朝）

銀行内に入ると、客や行員がヒソヒソと話しながら壮子を見る。

壮子の声『みんな私のお金を狙ってる……』
その時、後ろから肩を叩かれる。

壮子「ひっ！」

壮子、振り向くと、副支店長・金丸富雄（48）と警備員・銭谷保（41）が立っている。

金丸「お客様。行内では帽子とサングラスを外して頂けますか？」

壮子の声『こいつは敵？ 味方？ 当選金狙い？』

壮子、名札を見ると【副支店長 金丸富雄】と書かれている。

壮子の声『金丸……敵だあ！ 敵襲だあ！
こっちは！？』

警備員の名札は【銭谷】である。

壮子の声『銭谷……こっちもかつ！ 囲まれ

た！ もはやこれまでか……』

金丸「あの、お客様……？」

壮子、宝くじを取り出そうと内ポケットに手を入れる。

錢谷、警棒に手をかける。

カウンター内では、非常ボタンに手を置く者、カラーボールに手を伸ばす者、携帯を手に取る者などがいる。騒ぎに気付いていない老紳士が呑気にあくびをし、続けてくしゃみをする。

老紳士「ブエックション！」

非常ボタンに指を置いていた行員が、驚いてボタンを押してしまふ。

非常ベルが鳴り響く。

錢谷は壮子に飛びかかり、行員はカラーボールを投げつける。

行内は騒然とする。

床に押しつけられた壮子の右手には、宝くじが握られている。

○同・応接室（朝）

壮子、カラーボールのペンキまみれでソファに座っている。

向かいに、金丸、行員Aが座っている。

金丸、先ほどと一変して満面の笑み。

金丸「それならそうと早く仰って下されば良かったのに……」

壮子「はあ……」

金丸「では早速、当選券の確認を……」

壮子「先に、今後の流れを教えてくださいませんか？」

金丸「承知しました。失礼ですが、成島様は当行に御口座をお持ちでしょうか？」

壮子「いいえ」

金丸「でしたら、この機会に御開設いただきまして、そちらに全額お入れした状態で通帳をお渡しいたします」

壮子「銀行は信用していいんですか？」

金丸「……はい？」

壮子「3億入る鞆も持って来たんですけど」

金丸「あ……それはあまりお勧めは……」

金丸と行員A、顔を見合わせて苦笑い。

○公民館・室内（夜）

劇団八方塞がり稽古をしている。

滝藤「はい、じゃ、10分休憩して、その

後ちよつと話があるから」

全員「はい」

滝藤「誰か成島から連絡来てない？」

劇団員A「本番前なのになー」

劇団員B「ま、セリフ一言だし」

滝藤「そういう問題じゃないだろ。原山さん、

ちよつと電話してみてもらえる？」

原山「はい、分かりました」

原山、壮子に電話を掛けつつ外に出る。

○同・玄関前（夜）

電話をしている原山。

呼び出し音に着信音が重なる。

少し離れた所に壮子がいた。

原山「成島さん」

壮子「あ……」

原山「お金、持って来てくれた？」

壮子「それが……今日忘れちゃって……」

原山「じゃあ次でいいわよ。え、もしかしてそれで入りづらかったの？」

壮子「まあ……」

原山「ほら、入って。座長が話があるみたい」

○同・室内（夜）

滝藤を囲んで劇団員が座っている。

滝藤「いいかー。今度の公演、伊勢島幸助さんが観に来て下さることになった」

劇団員、ざわつく。

滝藤「成島が招待してくれたんだよな？」

壮子「え……でも、私オーディション落ちたんですけど……」

滝藤「何か爪痕を遺したんだろうな。伊勢島さんは秋にも舞台をやるから、これはチャンスかもしれないぞ」

劇団員、色めき立つ。

○ゲイバー・バット&ボールズ（夜）

時子がエミリーに相談している。

時子「友達の話なんだけどね、妊娠して、彼氏は金銭的に無理だから堕ろせて言ってるらしいの。育てるのってそんなにお金かかるの？ 堕ろすのもお金かかるよね？」

エミリー「あのね、まずお金の問題じゃない。育てていくには親になる自覚が必要だし、堕ろすのは母体に掛かる負担も理解しなきゃだし、てかなんでオカマに相談すんのよ」

時子「いや、ママは経験豊富だから」

エミリー「妊娠なんて経験ないわよ」

壮子が入って来てカウンターに座る。

エミリー「いらっしやい」

壮子「水道水ください」

エミリー「いいわよ、無理に頼まなくて」

壮子「あの、相談があるんですけど……」

エミリー「ちよっと待って。店閉めちゃうね」

× × ×

壮子と時子、カウンターにいる。

エミリー「メールをくれた人に会う？」

壮子「はい」

エミリー「どういうことよ」

時子「メールってどんな？」

壮子、様々な件名のメールを見せる。

【小学校の同級生です】

【ご無沙汰してます。伯母です】

【久しぶり！ 颯太です！】

時子「いやいや、まさかアンタ、信じてるんじゃないでしょうね？」

壮子「うーん、もしかして本物だったら、と思うと……」

エミリー「嘘だったら？」

壮子「もちろんお金は渡さない」

時子「百パー嘘でしょ。会うなんてリスクが高過ぎるって」

壮子「ママは嘘が見抜けるんですよね？ だから、ここで会うの。で、ママに見てもらって、判断してもらおうの」

エミリー「まあ、見てるだけなら別にいいけ

ど」

時子「あ、ここが待ち合わせ場所になれば売り上げが伸びるからでしょー」

壮子「早速明日から、いいですか!？」

○ゲイバー・バット&ボールズ(日替わり)

カウンター内にエミリー、その前に時子が座っている。

壮子と自称叔父・成島卓三(54)がテーブルに座っている。

卓三「25年ぶりだねえ、壮子ちゃん」

壮子「おじ……さん?」

卓三、証券会社の名刺を出しながら、
卓三「おじさんだよ? でね、もしね、もしもだよ? もしも今すぐに使わないお金があるなら、このご時世、銀行に預けてたつて増えやしないからさ、おじさんに預けてみる手もあると思うんだよね」

壮子「え、どれくらい増やせる?」

卓三「相場にもよるけど、2倍は固いかなー」

壮子、カウンターのエミリーを見る。

エミリー、【×】の合図。

壮子「すごおい！ じゃ、まず5万預けるか

らさ、これが2倍になったら信じようかな」

卓三「え？」

壮子「叔父さん、昔から言ってたじゃない。

目で見たモノだけを信じなさいって」

卓三「あ、ああ、うん、言ってた言ってた」

壮子「だから、これが明日までに2倍になっ

たら、次はドカンと預けようかなって」

卓三「いや、さすがに明日には……」

壮子「えー。でも、明日には全部定期預金に

する予定だからさあ……」

卓三「……分かった、じゃあまた明日会おう」

×

×

×

壮子、時子、エミリーがいる。

時子「何で渡したの！」

エミリー「3億当たった人から5万だけもら

おうなんて人いない……でしょ？」

壮子「そういうこと。明日必ず10万持って

くる。さあ、次は小学校の同級生が来るわ」

小林節子（30）が入って来る。

節子はブサイクである。

節子「壮ちゃん？ 久しぶり〜！」

× × ×

節子、壮子の前に座っている。

節子「壮ちゃん、全然変わってないね！」

壮子「節子ちゃんは、随分変わったね。私が

知ってる節子ちゃんと全然違う」

節子「あー、あたし、整形したから！」

エミリー「（時子に）整形してそれはないわ」

節子「そんなことよりさ、こないだ小学校の

裏庭で、これを見つけたの。覚えてる？」

節子、泥まみれの缶を出す。

壮子「いや、何だっけ？」

節子「卒業式の日に埋めたタイムカプセル！」

壮子「そうだっけ？」

節子「開けてみようよ！」

蓋を開ける節子。

中からメモが出て来る。

節子「『しょうらい、どっちかがお金持ちになつたら、びょうどうに山分けしようね。』」

壮子・節子』だって、可愛い〜」

壮子、エミリーを見ている。

エミリー、【×】の合図。

節子「壮ちゃん、財布出して」

壮子「えっ？」

節子、言いながら財布を出す。

壮子、仕方なく分厚い財布を出す。

節子「あー、私4万8千円だー。たくさん持

つてて損しちやいそう〜」

時子「奴の戦略が分かんない」

エミリー「あまりに少ないと怪しまれるから

でしょ。多分これを見て金額設定してるわ」

エミリー、今朝の壮子のツイートを見せる。

財布の写真と【25万入れた財布はこんな感じー】というツイート。

時子「え、ヤバくない？」

節子「壮ちゃんは？ え、見ていい？」

節子、壮子の財布を取り上げ中を見る。

レシートばかりが出て来る。

節子「え……？ 2千円……だけ？」

壮子「わあ……何だか悪いわぁ」

節子「え、25万持ってるんじゃないの？」

壮子「え？ 何の話？」

× × ×

壮子、時子、エミリーがいる。

時子「なんだかんだでうまく稼いでない？」

壮子「次はねえ、私を産湯につけた産婆さん」

エミリー「攻めてくる角度がすごいわね」

○ゲイバー・バット&ボールズ

壮子、色々な人と会うモニタージュ。

壮子ナレ『こうして私は、自称中学の先生、

自称おじいちゃんの教え子、自称お母さん

の髪を切っていた美容師、などなど、1週

間で30人以上と会った。本物は一人もお

らず、私は50万円を稼ぎ出した』

○ゲイバー・バット&ボールズ（日替わり）

壮子、時子の前でお金を数えている。

エミリー、少し離れた所でテーブルを拭いたり開店準備をしている。

壮子「47、48、49、50！ よし、ピツタリ50万！」

時子「え……あの、もしかして最初から稼ぐつもりで……？」

壮子「稼ぐって人聞き悪いなあ。嘘八百を並べて金に群がる奴らを懲らしめただけ」

時子「マジで……私、壮子が騙されないか、ずっと心配してたのに……」

壮子「ごめんごめん。私、女優だからさ。嘘なら負けないの」

壮子、鞆からハンカチを出し、トイレに行く。

時子、壮子の鞆の中に宝くじを見つけてる。

エミリーは見えていない。

時子、宝くじを手取る。

エミリー「ねえ、何か飲む？」

時子「え？ あ？ や？ だい、だいじよぶ」

時子、宝くじを咄嗟に内ポケットに入れてしまう。

壮子、トイレから帰って来る。

壮子「じゃあ、私、稽古があるから」

エミリー「はい、いってらっしゃい」

壮子、出ていく。

時子、立ち上がり、

時子「じゃあ、私もそろそろ……」

エミリー「待ちなさい。私に隠し事が出来る
と思ってるの？」

固まる時子。

○公民館・室内（夕）

劇団八方塞がりの稽古開始前。

壮子、百合に50万円渡す。

壮子「すみません、遅くなりましたっ！」

百合「へ？ いやいや、長いこと預かっても
らってごめんね」

滝藤「さあ、今日は最後の稽古だからな。気合入れていくぞー」
全員「はい！」

○ゲイバー・バット&ボールズ（夕）

カウンター上の宝くじを挟んで時子と
エミリーがいる。

エミリー「事情を説明しなさい。親友のお金を盗むような子じゃないことは分かってる」

時子「……」

エミリー「こないだの妊娠の話、時子ちゃんのことなんだよね」

時子「……はい。私、産みたい……お金さえあれば産めるんです……」

エミリー、札束が入った封筒を渡す。

時子「え？」

エミリー「とりあえず出産費用。宝くじは落ちてたことにして返そう」

時子「ママ……」

エミリー「そんなはした金で友達なくすんじ

やないわよ。返そうなんて考えなくていいから。そのお金はね、あんたがこの店で飲む時に、毎回少しずつ水道水で薄めて、そのあぶく銭を貯めたポツタクリ貯金だから」

時子「ありがとうございます……」

時子、感謝の涙を流している。

エミリー「それにしても、あの子……換金せずに劇団の50万を稼ぐために色んな人と会って小銭を巻き上げてたってわけか」

時子「どうして……さっさと換金しちゃえばいいのに」

エミリー「うーん……何か換金できない理由があつたのかな……」

時子「換金できない理由……？」

二人、宝くじを見つめる。

時子・エミリー「あっ……！」

○小劇場・劇場内（夜）

壮子の舞台公演本番。

客席にはエミリーと時子がいる。

壮子は舞台上で、木の役である。

顔を茶色く塗り、目を瞑っている。

主人公「くそっ、俺なんて……俺なんて……」

主人公が跪いて落ち込む。

雷鳴が轟き、壮子がカツと目を見開く。

壮子「顔を上げるのよっ！ あなたには、幸

せを追い掛ける足と、幸せを掴み取る手が

あるじゃない！」

再び雷鳴が轟き、壮子は目を瞑る。

○同・ロビー（夜）

狭いロビーに時子とエミリーがいる。

壮子が出て来る。

壮子「時子、ママ、ありがとう」

エミリー「すごいわー、壮ちゃん、2時間出

ずっぱりだったじゃない！」

壮子「セリフは1個だったけどね」

時子「でもすごい良かったー」

伊勢島が壮子に声をかける。

伊勢島「成島壮子さん」

壮子「伊勢島さん！」

伊勢島「あの時はご縁がなかったが、どうも光るものを感じて観に来たんだ。ぜひ次の舞台に出てくれないか」

伊勢島、チラシを壮子に渡す。

エミリー「嘘ね。あんた、終わり際に入って来て、壮ちゃんの芝居見てないじゃない」

時子「はーん。さては、これが目的ね？」

時子、壮子が受け取ったチラシを奪う。

【特別レッスン開講！ 受講生には、次回出演を約束】と書かれており、金額欄が300万円に修正されている。

時子「資金集めのために壮子をスカウトしに来たのね」

伊勢島「いや、ち、ちが……」

壮子「伊勢島さん。今まで憧れでした。ありがとうございます。（スタッフに）お客様お帰りです」

伊勢島、スタッフに連れられ、去る。

○同・劇場内（夜）

ガランとした劇場内。

壮子、時子、エミリーだけがいる。

エミリー「まだまだ賞金狙ってくる奴が絶えないのね」

その時、壮子の携帯に春江から着信。

壮子、出る気にならず【留守対応】を

押し、留守電になり、春江の音が響く。

春江の声「壮子。舞台、終わった頃よね。行けなくてごめんね。本当は行くつもりだったんだけど、父さんが入院したの。今度は本当よ。こないだはね、あんたが『入院でもしない限り帰らない』なんて言うから、つい嘘をついてしまったの。ごめんなさい。今度は本当だから、お願いだから顔見せに帰って来てよ……」

電話が切れる。

エミリー「声から判断すると、嘘は言っていないと思う」

壮子「それは……私にも分かる」

時子「私、車だけ」

壮子「いや、でも……」

エミリー「こういう時は、甘えるべきよ」

壮子、時子を見る。

時子、頷く。

○時子の車（夜）

運転席に時子、助手席に壮子、後部座

席にエミリー。

壮子「ごめんね」

時子「いや、全然いいけど、私、免許取り立

てで右折とバックは出来ないから」

壮子「怖いこと言わないでよ！」

間。

壮子「実は、二人に隠してたことがあるんだ

けど……」

エミリー「宝くじのこと？ 災難だったわね」

壮子「え……どうしてそれを……？」

エミリー「私に嘘つこうとするんじゃないっ

て」

時子「偉そうに。私が気付いたのよ」

壮子「ごめんなさい、言い出せなくて」

エミリー「いつ気付いたのよ」

壮子「銀行で……」

○銀行・応接室（回想・朝）

壮子、カラーボールのペンキまみれで

ソファに座っている。

向かいに、金丸、行員Aが座っている。

金丸「注意点は以上となります」

壮子「分かりました」

金丸「では、当選券を……」

壮子、宝くじを差し出す壮子。

金丸、それを手に取り、

金丸「あの……こちらは？」

壮子「はい？」

金丸「いえ、現在換金を受け付けております

のは、第143回の宝くじでして、こちら

は……」

3人、宝くじを覗き込む。

第142回の宝くじである。

壮子「え……じゃあ、もう換金できないんですか!？」

金丸「いえ、そもそも当たっていないですね」
間。

3人「あははは……」

3人、乾いた愛想笑いをする。

(回想終わり)

○時子の車(夜)

時子「それはショックだったわね……」

エミリー「しかし、うまく番号だけ撮ったわね、この写真。第何回とか全然分かんないもん」

エミリー、ツイッターを見ている。

壮子「いや、わざとじゃないんです」

時子「で、その時点ですでに劇団のお金を使い込んでたから、回収するために寄ってきた輩を利用したってわけね」

壮子「……」

車内のテレビで、『有名人が会いたい

人に会う』的なバラエティ番組が流れている。

司会「さあ、会いたいのほどなた？」

ゲスト「30年ぶりに会う恩師です」

司会「果たしてカーテンの向こうにいらっしやるのでしょうか。それでは、呼んでください！」

ゲスト「佐田先生！」

ゲストと先生の再会を観客が拍手で祝う。

壮子「実は、私が女優を目指したキツカケつて、この番組なんです。有名になって、テレビから兄に呼びかけようと思った」

時子「そうだったの……」

壮子「でも結局は鳴かず飛ばずで……。宝くじをツイッターに載せたのも、兄を探すためだった。全然知らない人から親戚ですつて連絡が入るぐらいだから、本当の兄からも連絡があるかもしれないと思って」

エミリー「お兄さん思いなのね」

壮子「両親に会わせたいんです。両親がずっと会いたがってるし、父ももう長くないだろうから」

テレビでは、感動の再会が続いている。エミリー「今会っても気付かないかもね。ほら、この芸能人、懐かしいフリしてるけど絶対ピンと来てない」

壮子「ほんとだ。私ならもっと上手く芝居できるのに」

時子「木の役なら、でしょ」

車内が笑いに包まれる。

壮子「あーあ。宝くじが当たったと思った時は、千個のアンラッキーと引き換えにラッキーが舞い込んだ！と思ったのになあ。一万個貯まるまでいいことないのかなあ」
車は田舎道へと走って行く。

○谷町病院・駐車場（夜）

車が駐車場に着く。

時子「私、ここで待ってるから」

エミリー「じゃ、私も」

壮子「ママは一緒に来て」

エミリー「何ですよ。私が一緒に行ったらビツクリされるでしょ」

壮子「お願い……両親と喧嘩して家を飛び出して、会うのは3年ぶりです……ママと一緒に来て欲しいの」

エミリー「ママが2人になってややこしいじゃない」

壮子「お願い。部屋の入口までいいから」
エミリー「しようがないわねえ……」

○同・病室（夜）

孝臣、ベッドに寝転んでいる。

春江、そばの椅子に座っている。

壮子、部屋に入った所で立っている。

壮子「久しぶり……だね」

春江「壮子……」

孝臣「無理して来んでもええんに……」

春江「あなた。（壮子に）父さんね、壮子に

会うの、楽しみにしてたんだから」

壮子「うん……」

孝臣「余計なこと言うな」

春江「で、そちらは？」

壮子の隣にエミリーもいる。

エミリー「（小声）廊下までって言ったのに！」

壮子「（小声）しょうがないでしょ、廊下は看護師さんに怒られたんだから！」

春江「どちら様なの？」

壮子「あー……友達。エミリー」

春江「外国の方かしら？」

壮子「えっとね、ここまで送ってもらったの」

春江「まあ、すみません」

エミリー「いえ、ほんと、お構いなく」

エミリー、ギリギリ遠くで待つ。

壮子「あのさ、お母さん。本当に宝くじのこ
と知らないの？」

春江「宝くじ？」

壮子「うん」

春江「ああ、昔野菜と一緒に送ったわね。ハズレ券だったけどね。あれ、9月2日にまた何か当たるんでしょう？」

壮子「え、一回開けてたの？ちゃんと閉まってた気がしたけど……」

春江「ふふふ。宝くじは開けるのが楽しいんだって言って、父さんがのり付けしたのよ」

孝臣「だから余計なことを言うな」

壮子「マジか……」

春江「なに、それが当たったの？」

壮子「いや、当たってないんだけど」

春江「なんだ。ま、当たったとしても分け前なんて期待してないよ。年取るとね、余計なお金は持ちたくないのよ。生活費はアンタが毎月仕送りしてくれてるので十分だから」

壮子「仕送り？ 私が？ 何それ、知らないわよ」

春江、孝臣の顔を見る。

孝臣「そんなことだろうと思った。売れない

自称女優が、毎月あんなに仕送りできるわけがないもんなあ」

春江「ふふふ……そうね」

孝臣「太一、お前なんだろう。お前が壮子の名前で仕送りしてくれてたんだろう？」

父の目は、エミリーを見ている。

エミリー「やっぱり親父には分かるか。ここまで変わっても」

孝臣「馬鹿。全然変わってねえよ」

春江「ほんと、5歳の時からちっとも変わっていない」

エミリー「うるせえよ」

○同・屋上（夜）

壮子とエミリー、月明かりに照らされている。

エミリー「いつ気付いたんだよ」

壮子「最初に会った時よ」

エミリー「元銀行員だって言ったからか」

壮子「違うわよ、バカじゃないの」

エミリー「バカとは何だ、バカとは」

壮子「お兄ちゃんは私が舞台女優やってるから私だって分かったの？」

エミリー「は？」

壮子「職業で判別する兄弟がどこにいるのよ。家族が家族を見て家族だって分かるのに理由なんてないよ。だって何にも変わらないんだもん」

エミリー「え、最初に気付いたなら、なんでメールを寄越した奴らと会ったりしたんだ？」

壮子「お兄ちゃんには、出来れば自分から名乗り出て欲しかった。どんな姿になっても、俺がお前のお兄ちゃんだよ、って。妹が窮地に陥れば、名乗り出てくれるかなって思ってたの」

エミリー「ふっ…：大人になったな、お前」

壮子「そう？ 全然変わってないつもりなんだけどね」

間。

エミリー「さつき、一万個のアンラッキーを貯めるって言ってたよな」

壮子「うん。あと九千個。そしたら今度は本当に宝くじが当たるかも」

エミリー「それな、残念だけど、また0からだぞ」

壮子「え？」

エミリー「いいこと起こっちゃったらリセットだろ」

壮子「……」

エミリー「こうして家族が再会出来ちゃったし（両親の笑顔が映る）、お前の大切な親友にもめでたいことが起こってるし（車の中で彼氏と電話しながら、幸せそうな泣き笑いでお腹をさする時子が映る）。そういうのを自分の幸せって思えるかどうかじゃねえのかなあ」

壮子「……」

エミリー「それに、これは女の勘だが、きっとお前自身にもいいことが起こる気がする」

壮子「は？ 女の勘？」

その時、壮子の携帯が鳴る。

佐倉マネージャーからである。

壮子「きっとハリウッドからのオフアーだわ」

壮子、電話に出る。

(了)